

小中一貫した指導の充実をめざして

上田市立菅平・小中学校

本校の位置する菅平高原は、上信越高原国立公園の中にあり、年平均気温 6.5℃と日本最北端の稚内とほぼ同じ亜寒帯気候に属し、夏冷涼、冬厳寒という自然環境である。夏はレタス、ハクサイ等の高原野菜の栽培や各種スポーツ合宿の受け入れ、冬は良質を誇るパウダースノーでのスキーというように、一年を通して農業と観光業を柱に活気づいている地域である。

昭和33年に当時の小県郡長村小学校並びに三か村組合立中学校から独立して以来50年以上、小中併設校として小学校入学から中学校卒業まで9年間の子どもの成長を見守ってきた。現在の児童生徒数は、小学校64名、中学校26名、計90名である。行事や「校技」であるスキー活動、生徒会並びに児童会の活動等では、長く活動を共にしてきたが、平成21年度に地域の実情にあわせた柔軟な教育課程が編成できる文部科学省教育課程特例校の指定を受け、小中一貫教育を進めている。特例校としての内容には、「スキー科」「英会話科」の新設、小学校4年生以下での外国語活動の実施等も含まれているが、ここでは小中の職員が互いに授業に乗り入れての学習指導、小中一貫した生徒指導等について報告したい。



小中職員の相互乗り入れ授業

小中の職員が互いに乗り入れて学習指導することの利点は、専門性を生かした授業内容、中1ギャップへの対応等を挙げられるが、小規模校であるので職員数が限られ、全て思ったように乗り入れられるわけではない。例えば本校の場合、ここ数年中学校の非免許解消のため、家庭科免許を持った小学校職員が中学校に乗り入れることが前提となっている。そうすると、家庭科免許を持った小学校職員が担任している学年には優先的に中学校職員が教科指導に乗り入れることになるので、家庭科免許を持った小学校職員の学年配置にも配慮が必要となる。そういった条件を考えながら、現在は中学校職員が乗り入れる小学校の学年に配慮しつつ、「職員の専門性を生かす」「中学校の教科学習へのスムーズな移行（小学校5・6年生を中心に）」「小学校職員の授業時間を減らし、教材研究の時間を確保する」の3つの観点から、乗り入れる授業を決めている。また、小中相互に職員が乗り入れるためには、日課や時間割などを調整する必要がある。日課に関して本校では、2校時休みや昼休みの時間を調整することで小中の授業時間が開始か終了かのどちらかで同じになるよう工夫している。また、時間割については、小学校は原則的に固定時間割で授業を行っているが、中学校は出張等で自習時間を入れないよう週ごとに時間割を作っているため、それに合わせて小学校でも柔軟に時間割を運用している。これには、小学校職員の出張がある時に、乗り入れ授業を入れることができるというメリットがある。

平成22年度の小中相互乗り入れ授業

☆小から中へ

中学校全学年家庭科

☆中から小へ

小5・6理科 小3・6社会 小4図工

小5体育 小5・6外国語活動

☆小学校内一部教科担任制

小6家庭科

学力向上への期待が大きい相互乗り入れ授業であるが、先にも述べたように、こちらの意図した教科・学年へ思ったように乗り入れられる訳ではないのが実情である。例えば、全国学力・学習状況調査で対象となっている国語や算数・数学は、元々中学校での時数が多いため、持ち時数の平均化や中学校学級担任への持ち時数の配慮などを考えると小学校へ乗り入れることが難しく、現在は行っていない。また、国語は書くことや話すことの指導など、教科以外の時間との関連



が密接な教科であるので、小学校の段階で教科担任制を行うことが良いかどうか迷うところでもある。それでも本校では、4年前に全国学力・学習状況調査が始まって以来、小学校は国語・算数共に全国正答率とほぼ同じであるのに対し、中学校では全国正答率を大きく上回る結果が出ている。これは、小学校から中学校への教科学習の移行がスムーズに行われ、小学校での基本的な学習指導が中学校の学習指導に生かされている結果ではないかと考えて

ている。相互乗り入れ授業を直接的に学力向上に結びつけるためには、職員の加配や免許上の配慮などが必要になると思われるが、本年度は、小学校5年生の算数で1単元限定の乗り入れを試みた。当該学級の児童は「とてもわかりやすい授業でとても楽しかったです。」「電子黒板でわかりやすく教えていただきました。また、先生と一緒にやりたいです。」と感想を述べている。また、授業者も「小学校5年生の児童と学習をしたのは図形分野の一部でした。しかし、それはゆくゆくは中学校2年生で扱う基礎となるものです。中学校では、補助線を用いて理詰め（証明）で学んでいきますが、小学校では、具体物を意識して扱いました。中学生には『分かり切ったことを今更…』という雰囲気も感じられますが、小学生は、『本当にそうかな？』と疑問に裏付けされた感動を味わっているように感じられました。この数時間の経験を通して、『中学生にも、小学生と同じように感じさせることはできないか？』と思うようになり、電子黒板を使って授業を展開してみたり、問いかけの工夫をして、授業の最初に『本当にそうかな？』と感じてもらえるような展開を意識して授業をいます。」と手応えと共に新たな自己課題を持ったようだ。これからも様々な形で、乗り入れ授業の可能性を探ってみたい。

小規模校のよさは、すべての子どもに目が行き届くことであると思われる。逆に、職員の数が少ない

子ども理解をベースにした生徒指導

ので、一人の子どもを多面的に見るといふ点では、意識的な取り組みが求められる。本校では、相互乗り入れ授業を行っていることもあり、全ての児童生徒を全職員で理解し、全職員で指導に当たることを生徒指導のベースとしている。従って、校別職員会議のみならず、合同職員会議でも気になる子ども達の情報を交換して子ども理解を進めている。また、職員室が同じなので、小中の職員が互いの子ども達について、日常的に気づいたことを話し合うことにしている。これには、小中の職員の一体感が必要である。一つの組織として校務を分担し合い、研修や厚生も一緒に行うことで、日常的に職員間の交流が生まれるよう工夫している。

本年度、入学してきた小学校1年生10数人の中に多動な児童が数人おり、落ち着いて学校生活のスタートを切ることが難しかった。そこで、小学校職員だけでなく中学校職員も空き時間を使って小学校1年生の教室へ支援に入ることを提案し、快く協力してもらうことができた。小学校1年生の教室へ支援に入った中学校職員からは、「小学校低学年の先生たちの苦勞がわかった。」「どのように話せば言葉が通じるのか戸惑った。」「子どもの発達段階に合わせた言葉で丁寧に話すことの大切さを改めて感じた。」等の声が聞かれ、支援に入った職員にも大切な研修の機会になったようである。



雄大かつ厳しい自然環境と学校への協力を惜しまない地域の方々、年々児童生徒数は減少しているものの、子どもたちは小中の区別なく皆家族のように仲がいい。これからも、地域の特性と小中併設校のよさを生かし、特色ある教育活動を進めていきたい。また、本校の取り組みに対して、様々な角度からご教示いただければ幸いである。